

長編少年少女小説

春の 目玉

福田清人



長編少年少女小説

春の 目玉

福田清人



講談社

はる 春 の 目 玉
ふく 田 清 と 人

講 談 社 昭和43

212p 21.5cm

著者の了
解により
検印廃止

みなさん、お読みになった感想をお
知らせください。このあと、どうい
知らせください。このあと、どうい
知らせください。このあと、どうい

昭和三十八年三月十日 第一刷発行 昭和四十三年十一月十日 第二十二刷発行		定価 四五〇円
著者 福田清人 発行者 野間省一 印刷者 盛英信 印刷所 慶昌堂印刷株式会社	東京都文京区音羽二一二二二 株式会社 講談社 電話・東京 〇一〇二二(大代表) 振替・東京 三九三〇番 郵便番号 一〇一〇二	発行所

(製本 大光堂)

◎ 福田清人 一九六三年

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

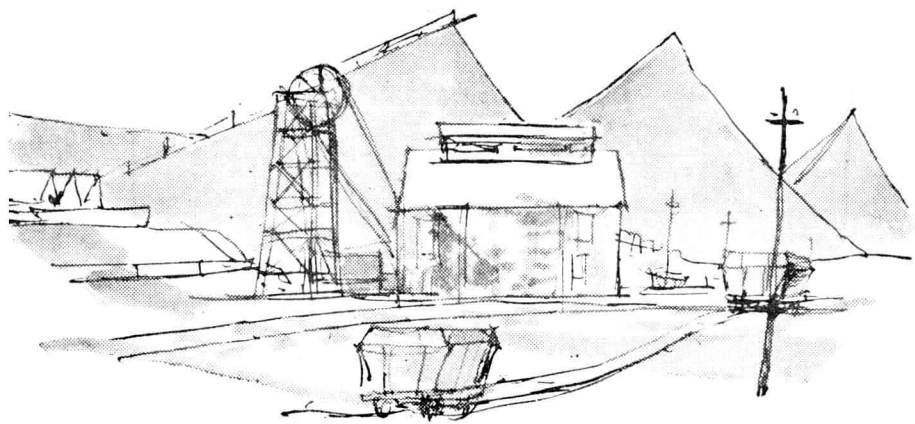
PRINTED IN JAPAN

ぐつと大きく目をみひらいて、
すべてのもを、よく見よう。

君の目玉にうつるものを、よく見
ゆけて、どんどんのびて行こう。

君の美しい心は、君のよくあんだ
目玉に春の光のようにあらゆれる。

福田清人



もくじ

第一章 黒い町

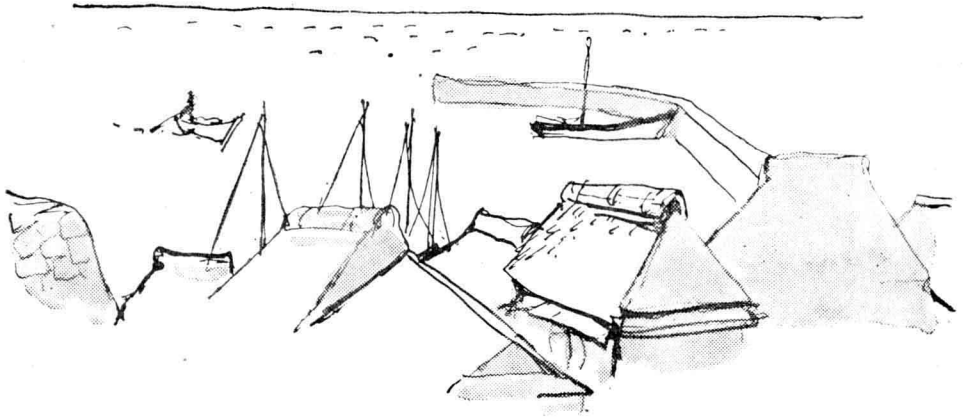
- 新しいのち 7
- 炭坑の家 11
- こわいおじいさん 16
- 健という子 20

第二章 健のおいたち

- ひとりぼっちの波止場 23
- きみような教室 28
- 逃亡 34
- とうげをこえて 39

第三章 おさない友情

- おじいさんのじまん話 46
- 暗いあな 55
- 健去る 63



第四章

一年ぼうず

新しい社宅	68
物語の世界	77
大水の日	82
初めての海	87

通学の旗	91
------	----

道くさ	98
-----	----

小さい心の傷	102
--------	-----

さらば黒い町	104
--------	-----

第五章

青いみさき

転入生	111
-----	-----

あみもの娘	121
-------	-----

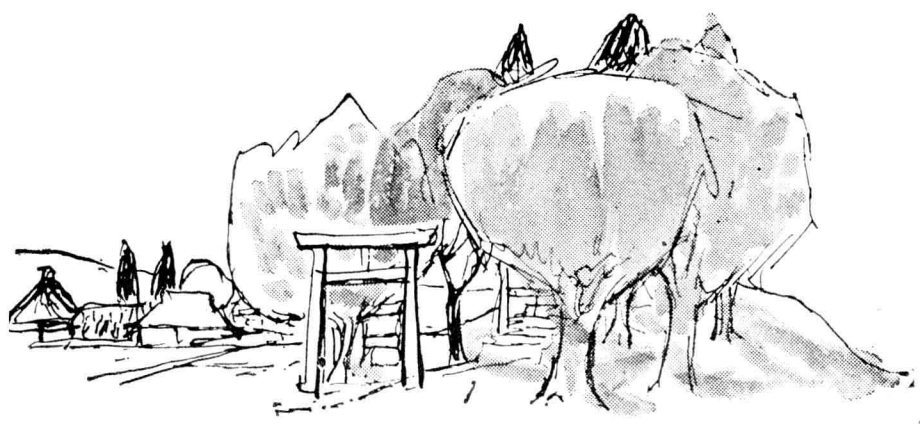
とけいの見方	125
--------	-----

村の子なみに	129
--------	-----

ウナギさし	132
-------	-----

ウナギつか	137
-------	-----

剣道入門	142
------	-----



第六章

とあみうち……………146

海辺のくらし……………

泳ぎのけいこ……………153

荷札の旅……………161

さびしい田んぼ道……………167

こいししみさき……………170

こま遊び……………172

たこ合戦……………178

第七章

春近く……………

一家の物語……………187

古いふね……………193

中学入学……………199

だるまの目玉……………204

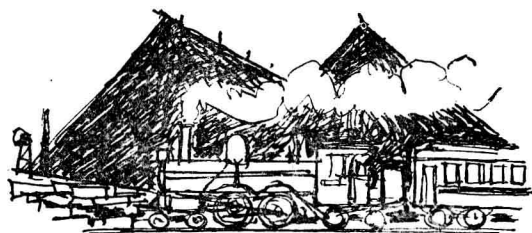
あとがき……………208

レイアウト
 安野光雅
 寺野光雅
 島野光雅
 竜野光雅
 一雅

春の
目玉

第一章

黒い町



新しいのち

「えっさ！」

「えっさ！」

前後ふたりのかごかきの、かけ声も高く、一ちようのかごが、秋晴れのたんぼ道を、いっさんに走っておりまして。おどろいた草むらのバッタがびんびんはねています。「道がひどいので、たいへんじゃのう。」

かごの中で、そういったのは、村でたったひとりのお医者者の関岡さんでした。雨がふると小川のかわりにもなるよな、たんぼ道は、ごろごろと石がころがっているのです。かごかきもよろめきながら走っているのです。

今から五十年もむかし、九州の片いなかでは、急病人があると、お医者のかごでしんさつにでかけたものです。

みなさん、かごって知っていますか？

江戸時代、東海道など旅するとき、雲助とよばれる強そうな男が、前とうしろに棒をわたして、ふたりしてかついだ交通機関のあのかごです。

今なら、いなかのお医者も、自転車かオートバイ、あるいは自動車でしんさつにいきますが、そのころはまだそんなものはありませんでした。

関岡さんのかごの中では、カチャカチャと金ぞくのふれあう音がしていました。手術道具のふれあう音でした。

「あと、三十分もすればつくだろるか。」

関岡さんは、つぶやきながら気がかりのように、チヨッキのポケットの左から右へと、一文字にわたした金ぐさりから、じまんの金どけいをとりだして、ながめました。この鬼木村では、金どけいを持った人は、関岡さんだけです。村で一番えらい村長さんも、学校の校長さんも、関岡さんとおなじく、八の字ひげは、はやしていますが、金どけいは持ちません。

病気になるたお百姓たちは、関岡さんから右手で、そのみやくをとられるとき、関岡さんの左手にこの金どけいが光るのを見るのを、とてもありがたいと思います。ちよつとした、かぜやはらいたなど、それだけでもなおるほどでした。なにしろ黄金というものは、これではじめて見るというものが、鬼木村の人たちの大部分でしたから。

しかし、関岡さんは、それだからといってべつに高いしんさつ料や薬代をとうろつというのでもありません。

「やまいは気からというが、医者も病人を信頼させなくちゃならん。ニッケルの安どけいより金どけいがありがたがるなら、むりしても金どけいを手にいれたほうがよからう。」

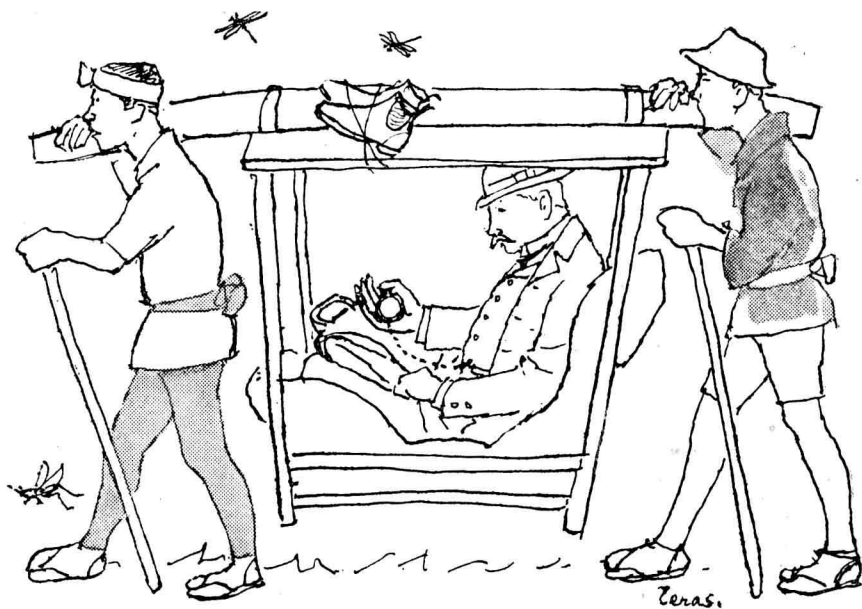
関岡さんは、ある日、関岡医院の代診をしている田口さんというわかい男にいました。そしてなにかのつこうで、病人の家にじぶんがゆけず、田口さんをかわりにやるときは、この金どけいをかしてくれました。

田口さんは、医者めんじょうをまだ持たないのですが、この金どけいをかるとひとりまえのお医者になったような大きな気がするのでした。

関岡さんは、気が小さくて、人のよい、この田口さんを、たいへんかわいがっておりました。

「田口は、さぞ、心配していることだろう。せっかくの子どもが、おさんがおもくては……。」

かごの中で、カチャカチャなっている手術のきかいは、田口のおくさんであるお杉のおさんが重いので、おなかの



中の赤んぼうの頭をくだくきかいでした。頭をくだいては、赤んぼうは、死んで生まれることになります。しかし、そのままだと、おかあさんもあぶないので、おかあさんをたすけるためには、やむをえない手術なのです。

田口のおくさんは、関岡医院のある、村でもにぎやかなところから、五キロほどはなれた山里の実家にいました。

「えっさ。」

「えっさ。」

かごかきは、かけ声をかけて、細いたんぼ道を走りつづけていました。秋も深く、もうあたりのたんぼのイネはすっかりかりとられて、きりかぶが、てんととのこつています。農家の庭先に、まっかに熟したカキが、枝におもそうに、たれさがっていました。

関岡さんは、心の中に、手術をしないですませたいと、いのような気持ちでした。手術がめんどうだからではありません。

関岡さんは、ここから遠い国の鹿児島の人でしたが、しばらく前は、大きな病院の院長もしたことがありました。

そして、この鬼木村に鉦山がほられたとき、そこの持ち主

が、おなじ鹿兒島の人でしたので、この村によばれてきたのです。しかし、その山に鉱物があまりとれなくなつて、その鉱山がとざされたあと、こののんびりした村が氣にいつてそのまま開業していたのでした。それで、こうした村にめづらしい名医で、村人たちからもやまわれていました。

「この世に生まれたがつて、おかあさんのおなかにやどつた子を、できれば、無事に世にだしたいものだ。世の中にどんなに役だつ子かも知れない。」

いま、かごの中で、そんな氣持ちでした。

関岡さんが、もう一度、金とけいを取りだして、その針をながめた目を、今からゆく山里のほうにむけたとき、まがりくねつたたんぼ道をいっさんに走つてくる人かげをみとめました。その人かげは、両手を高くふりかざし、なにかさげんでいるようです。

「いけなかつたか。」

そのようすで、このかごにむかつてさげんでいることが、はつきりわかりました。

「おさんがおもくて、おかあさんのからだか、とうとうたえられなくなつたという知らせか？」

と、関岡さんは、いつになく顔色をかえました。そして、かごの外へ、半身のりだしたのです。

しかし、そのさげび声は、

「生まれた！ 生まれた！」

と、はつきりと、きこえるではありませんか。

「おお、無事に生まれたのか、よかつた、よかつた。」

関岡さんは、いつか、かごからとびおりておりました。

よろこびのあまりチョッキのポケットにいれることをわすれた金とけいは、ぶらぶらとゆれ、秋の日にまばゆくかがやいておりました。

関岡さんのよろこびは、その赤んぼうの母がじぶんのおでしの田口のおくさんでなくても、おなじであつたことでしょう。関岡さんは、いそがしいおりに、遠いところまでせっかく往診したのに、じぶんがいらなくなつたことに、ぶきげんになるようなお医者ではありませんでした。

かごの中で、ぶきみな音をたてている、頭をくだくきかいつかわずにするだこと、そしてひとりのおさな、新しいのちが、この世にあらわれたことを祝福するよろこびでした。

こうして田口草夫は、この世に生まれたのです。

草夫は、ものごころついたころ、こうした生まれた日のことを、母のお杉からきかされたことがあります。

関岡さんのかごで、走ったんぼ道は、それから長い年月がたつて、りっぱな村道となり、今は自転車はおろか、自動車も走っています。草夫が生まれるころ、自動車があつて、それに関岡さんがのつてきていたなら、あるいは早く手術されて、草夫は、頭をくだかれてしまっていたかもしれない、そうすると草夫というじぶんは、この世にいないと、へんな氣になったこともあります。

「関岡先生は、おまえが頭をくだかれず、この世に生まれたのは、やはり神さまが、なにか、この世に、すこしでも、役だたせたいという心から、おまえをおおくりになったのだらうと、おっしゃっていたよ。」

草夫は、やはり、なにかのとき、一度か二度そんなことを父からきかされたことがあります。それは草夫をはげます氣持ちからだと思われます。そのとき、

「そんなら、ぼくだけでなく、この世に生まれた人間はみなそうでしょう。」

と、草夫は、いいたかつたのですが、だまっていました。心の中には、すこしでも世のためになれる人間でありたいという氣持ちはあつたのです。ことに他人とちがつて、ほんのもうすこしのことで、頭をくだかれたかも知れないと思うと、じぶんは、うんがよくてこの世に生まれてきた人間のような氣にもなるのでした。そして、年とともに、「じぶんはすなおな心と、よくすんだ目玉で世の中のものを見て、それをうけいれて、そしてすこしでも世の中のためになる人となるようにつとめよう。」と、だんだん思うようになりました。

炭坑の家

五、六台つないだ、みじかい汽車がつくと、やがて、二台の人力車が、山本という小さな駅から走りだしました。

前の車には、草夫の父の田口草太郎がのっています。うしろの車には、六歳の草夫をだいた母のお杉がのっています。

草太郎は、ひげをはやし、細いパイプをくわえています。そのパイプからは、すこしも煙がでません。おとなが

くわえているあんなくだのようなものからは、みな煙がでるのにと、草夫はへんな気がしました。

草太郎はくわえていたのは、ハツカのパイプです。そのころたばこをやめようとした人が、口がさびしいのでもちいたり、たばこはすわなくても、ハイカラな人が口にしていたものです。

草太郎は、ハイカラにそれを口にしていたようでした。それを、ひさしぶりにある妻のお杉に見せたかったのでしよう。

「あら、めずらしい、おとうさんが、あんなものをくわえていらっしやる。」

そういうちよっとおどろきにしたお杉の気持ちだが、しっかりだかれた草夫にもうつったと思われます。草夫がものごころついて、はじめてあった父には、このハツカパイプが、むすびつきました。

ものごころついて——そうです。草夫とその母は、五年間、父とはなればなれにくらしていたのです。

関岡さんの代診をしていた田口草太郎は、草夫が生まれてまもなく、となりの県の芳谷炭坑の病院につとめること

となりました。関岡さんが急になくなって、その医院がとざされたからです。

そのころ、草太郎は、独学で医者の免状をとろうと勉強していました。いまは医者は、かならず医科の大学をでて、国家試験をとおらねば免状をもらえませんが、明治時代までは、独学でも国家試験をとおると免状がもらえたのです。その試験は、前期と後期の二つがありました。前期というのは学術試験で、後期というのは、病人を前にしての実地の試験です。

医者は人のいのちをあずかるたいせつな仕事で、今でも大学をでて、国家試験をうけ、インターンという実地を一年やってはじめてひとりまえになるのです。独学では、試験をとおることはとてもたいへんなことでした。

草太郎の家は、まずしかったので、大学へゆけず、独学で医者の免状をとろうと勉強していったのです。草太郎は前期は、どうやらとおったのですが、後期がなかなかとおらず、何度も何度も失敗しました。草太郎が関岡さんの代診をしていたころは、前期の試験だけうかっていました。

ところで、草夫も生まれるし、ぼやぼやしてはいられない

い、どうか後期も早くうかって、ひとりまえの医者となり
たいと、炭坑の病院につとめる機会に、草夫とその母のお
杉を、その父の、倉蔵じいさんにあずけてひとりで、炭坑
の町にくらしていたのでした。

こうして、五年め、めでたく後期もうかったのです。

草太郎は、電報をうって、お杉と草夫を鬼木村からこの
炭坑の町によびよせたのです。関岡さんの代診時代には、
なかったひげと、パイプは、ひとりまえのお医者になった
しるしのようでした。ただ関岡さんのように、チョッキに
一文字にわたした金ぐさり、ポケットに入れた金どけいは、
まだ手に入れることはできません。それはなかなかねだん
が高かったのですから。

草夫は、汽車からおりたとき、母から、

「おとうさんよ、おまえのおとうさんよ。」

と、なみだぐんだおろおろ声でいわれても、草太郎におと
うさんという、強いあまえないような感じがすこししま
せんでした。見しらぬよそのおじさんのようでした。

しかし、このときから、草夫の前に、新しい世の中が、
ひらけたような気がしました。今までのそのむこうの世界

は、一まいの幕のかなたのようです。その幕のかなたに
は、あるとき、たくさんの人ごみの中に、母にだかれた草
夫がいました。その人ごみにとりまかれて、土俵があり、
たくましい力士たちが列をつくって、土俵の上をゆっくり
歩いていきます。そのうちその中のいちばん強そうな力士
が、いきなり、母のうでから草夫をさらって、たかだか
と、両手で、草夫をさしあげました。

「いやだ、おかあちゃん、こわいよう。」

おににさらわれたように、両手両足を死にものぐるい
に、ばたばたさせながら、草夫はなきさけびます。しか
し、力士は、それを母にかえそうともせず、土俵をゆうゆ
うとまわりつつけるのです。そしてなんだか歌みたいなも
のをゆっくりとなえていきます。

土俵をとりまく多くの人たちはもちろん、あのやさしい
母さえも、草夫を力士の手からとりもどそうとしてくれま
せん。なきわめく草夫の呼吸はたえ、しんぞうはやぶれそ
うです。そうして、力士はようやく土俵をひとまわりした
あと、母の手にぼいと、なげてわたししました。
「まあ、まあ、この子は、そんなになかなくともいいの

に……。これでおまえもうんと強くなるのよ。」

お杉は、そう草夫をたしなめながら、紙につつんだお礼のお金を、力士に手わたしました。なんでも、こんな力士に、子どもをだいてもらうと、その子は、力士のようにたくましくそだつということで、お杉は草夫の将来を思って、力士にだいてもらったのでした。

もう一つ、幕のかなたに、一つの光景がまぼろしのようにかびます。

そこには、部落の小さな神社があります。神社というよりはこらといったほうがいいでしょう。人が二十人もすわったらいっぱいになりそうな古いほこらのたてものは、広場から十段ばかりの階段で、高いゆかを持っています。その広場や、ほこらの中は、子どもたちのいい遊び場でした。

ある日、草夫は、その階段をころころと、ころがりおちていました。明るい光と暗いかげが、こもこもはげしくうつりかわってその目玉にうつりました。そして頭のほうからうでまでまっかな血が流れてきました。いっしょにいた子もりのおチマはおろおろとして、じぶんまで血をあげて、草夫をせおって、家につれていきましました。

子もりがついていたので、草夫が二歳か三歳のときでしよう。しかし、それは、ほんとうにそのときの記憶かまた、草夫の頭にのこっている三センチほどの傷あとのいわれを、母からきいて、なんだかそのようなことがあったような幻想をもつようになったのかわかりません。

とにかく、父にあうことでひらかれた新しい幕のかなたに、まぼろしのようにかぶのは、この力士にだかれた日のおそれと、ほこらの階段をころがりおちたこととただ二つだけでした。

母にだかれた草夫たちの二台の人力車をのせた地面は、しだいに黒さをましてきました。それまで、道の両がわに青々とその葉を波のようにゆすぶっていた水田もなくなりましました。

車の走るはるかむこうのほうには、いただきがとがって、ピラミッドのように末ひろがりになったおなじような黒い形の小山が、三つも四つもならんで見えました。それはボタ山といって、大地のその石炭をほるあなから、とりだしたそまつな石炭や土の山だということがあとでわかりました。